

〈原著論文〉

「出生前診断」を題材にした道徳教材の開発と検討

伊藤 利明*, 石村 由利子**

The Development and Examination of Moral Education Material Using the Subject Matter of “Prenatal Diagnosis”

Toshiaki Itoh and Yuriko Ishimura

要旨：本論文の目的は、「生命の尊さ」を理解するために、「出生前診断」を題材にした道徳教材を開発することである。そして、開発した道徳教材を用いて大学生を対象とした模擬授業を実施し、中・高校生向けの教材として適切かどうかを検討することである。そのため、第1に、本研究の目的を述べる。第2に、「出生前診断」を取り上げる理由を明らかにし、中学校学習指導要領の内容項目と関連付ける。「出生前診断」が教科においてどのように取り扱われているかを説明する。第3に、本研究の方法を述べる。研究対象者と手続きを述べ、倫理的配慮を説明する。読み物資料の問題設定の意図と配当学年を設定した経緯を述べる。読み物資料の概要を述べ、学習指導案の学習課題を指摘する。第4に、アンケート調査結果を概観する。学習課題の達成状況の認識を説明する。道徳教材としての適切性を検討し、中立性と配当学年を説明する。道徳の授業に対する提言と意見をまとめる。第5に、考察を加える。問題解決学習の実践が達成されたことを述べる。次に、資質・能力の3つの柱を育成する視点から、道徳教材としての適切性を評価する。中立性や配当学年を検討し、今後の課題を指摘する。第6に、アンケート調査の結果から導き出される結論を述べる。

Abstract： The purpose of our research was to develop moral education material using the subject matter of “prenatal diagnosis” to learn “respect for life”, and conduct trial lessons with university students to examine whether the material was appropriate for junior and senior high school students. In this article, to begin with, we explain the purpose of the research. Second, we explain the reasons why we chose this material and the relationship between the material and the content of the course of study for the junior high school curriculum. We explain how textbooks deal with the topic of prenatal diagnosis. Third, we state the methods of this research. We then outline the subjects of our research, the procedures involved, and ethical considerations. We go on to explain the reasoning behind our selection of comprehension material, and how we went about distributing the material to certain year groups. We then summarize the comprehension material, and point out issues with the lesson plans. Fourth, we summarize the results of a questionnaire on the appropriateness of the material for moral education. Next we measure the achievement of learning outcomes. We then examine the appropriateness of the material for moral education, and explain the neutrality of the material and its suitability for each year group. We also summarize suggestions and opinions relating to moral education. Fifth, we make observations regarding results of the research, and outline the success of problem-based learning. We then evaluate the appropriateness of the material in line with the three pillars necessary to develop certain characteristics and abilities. We also examine the neutrality of the material and its suitability for each year group and potential issues going forward. Sixth, we state the conclusions drawn from the results of the questionnaire.

Key words： 道徳教材 Teaching Material for Moral Education 出生前診断 Prenatal Diagnosis 生命の尊さ Respect for Life 問題解決学習 Problem-based Learning

受付日 2019. 5. 22 / 掲載決定日 2019. 9. 12

*関西福祉科学大学 健康福祉学部 教授

**名古屋女子大学 健康科学部 教授

はじめに

「生命の尊さ」を学習するための道徳教材は、既に合意された価値やルールを取り扱うことが多く、生徒は深く考えなくても、教師が期待する答えを発見できていた。従来の道徳授業は、心情理解のみに注目しており、気持ちの共有や共感に力点が置かれていた。道徳教育が登場人物の心情理解に留まるなら、深く考えることもなく模範的な回答に行き着くことは容易である。しかし、答えが一義的に定まらない道徳的問題の解決には、その心情に至るプロセス、問題解決のための方策や結果が多様であることを知り、その多様な選択肢から自分自身がベストと思う解決策を見出し、説明できる能力が養われなければ、汎用性がある知識とはならず、結果として役立たない。道徳的判断力を育成し、鍛えるためには、「考え、議論する道徳」を実践していかなければならない。そのためには、新しい道徳教材を開発する必要がある。

筆者らは、「生命の尊さ」に関連して、「こうのとりのゆりかご（赤ちゃんポスト）」と「出生前診断」に注目した。まず、「こうのとりのゆりかご」を題材として道徳教材を開発し、その適切性を検討した¹⁾。

今回は「出生前診断」を題材とした道徳教材を開発することを試みた。この「出生前診断」を中学校や高校で取り上げることは、「議論し、考える道徳」を実践することになる。「出生前診断」を受けるかどうか、子どもを産むか産まないかは、女性とパートナーのプライバシーにかかわる問題であると同時に、生命の選択を余儀なくしている現実がある。「出生前診断」を取り上げることは、「生命の尊さ」を考えるための有意義な道徳教材となる。

本論文では、「生命の尊さ」を理解するために、「出生前診断」を題材にした道徳教材を開発する。そして、開発した道徳教材を用いて大学生を対象とした模擬授業を実施し、中・高校生向けの教材として適切かどうかを検討する。

I 本研究の目的

本研究の目的は、「出生前診断」を題材にした道徳教材を開発し、中・高校生向けの教材としての適切性を検討することである。この目的を達成するために、看護学と教育学の知見を活用・融合して読み物資料の試案を創作した。

読み物資料を用いた授業のために、アクティブ・ラーニングの方法を取り入れた学習指導案を作成した。学習指導案は高校 3 年生を想定して作成した。この学習指導

案に基づいて、大学生を対象として、道徳の授業を実施した。授業終了後に、アンケート調査を実施し、「出生前診断」の道徳教材に対する大学生の意見を聞き、道徳教材としての適切性を検討する材料とした。

II 道徳教材としての「出生前診断」の意義

1 「出生前診断」を道徳教材として取り上げる理由

「出生前診断」を道徳教材として取り上げる理由として、次のことを指摘できる。第 1 に、「出生前診断」は中・高校生が将来経験する可能性が高い技術であり、現実的な問題のひとつである。女子は妊娠した時、男子はパートナーとして、この問題に直面する。

この「出生前診断」を受けるかどうかは、道徳的な問題を含んでいる。染色体異常が分かった時、子どもを産むか産まないかの決定が母親とそのパートナーに委ねられる。人工妊娠中絶をすれば、子どもの生命を奪うことになる。子どもにも生きる権利があるので、たとえ親でも子どもの生命を奪うことはできないという主張もある。

2013（平成 25）年 4 月から 2018（平成 30 年）年 3 月末までの統計では、新型出生前診断を受けた 58,150 例中、陽性者数は 1,038 例で、このうち、確定検査で偽陽性だったものと調査の継続ができなかったものを除いた陽性者 922 例の妊娠中断率は 79.1% と報告されている²⁾。

大学生の多くは「出生前診断」を知らない。道徳の授業で「出生前診断」を学習しても、「出生前診断」に関する問題がすべて理解されるわけではない。しかし、道徳教育の中で取り上げることは、生命の選択につながる問題を考える貴重な機会となる。

第 2 に、「出生前診断」を受けるかどうかは、答えが定まらない論争的な問題である。答えが定まっていたら、生徒はあまり考えなくても良い。生徒は世間で合意された答えを道徳の授業で発表することになる。他方、答えが定まっていなければ、生徒は自分なりの答えを考えなければならない。個人で又はグループで考えさせることが大切である。「考え、議論する道徳」を実践するためには、答えが定まらない問題を取り上げることになる。

第 3 に、「出生前診断」は、問題解決的な学習を実践する道徳教材として役立つ。問題解決的な学習は、従来の道徳教育のあり方への批判から生じている。従来の道徳教育では、読み物資料の登場人物の気持ちを推しはかることが中心であり、生徒が主体的に考えることは十分ではなかった。そこで、生徒が自ら課題を発見し、その課題に対する解決策を考えることが大切だと主張される

ようになった。道徳を教える一部の教師は、発問を工夫し、生徒に考えさせることもしていたと思われるが、多くの教師は登場人物の気持ちを推察し共感することに力を注いでいた。登場人物の気持ちも大事であるが、生徒が論理的に考えることが少なかったのである。この問題解決的な学習は、「考え、議論する道徳」を実践できる指導方法と言える。

問題解決的な学習は、学習指導要領にも記載されており、指導方法のひとつとして位置付けられている。中学校学習指導要領 第3章 特別の教科 道徳 第3 指導計画の作成と内容の取扱い 2(5) では、道徳の指導にあたっての配慮事項が、「問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習等を適切に取り入れるなど、指導方法を工夫すること」とされている。

2 「出生前診断」を道徳教材として取り上げる場合の配慮

本稿で取り上げている「出生前診断」は、通常の妊婦健診で行われる画像診断などによる胎児発育評価を含む広義の用語ではなく、積極的に胎児異常を診断するための検査を指す狭義の意味で用いられている語である。形態的、機能的な異常や遺伝性疾患などのスクリーニング検査を指し、希望する妊婦に対して行われている。インフォームドコンセントが必要であり、遺伝カウンセリングを受け、胎児に対して親として責任ある立場で検査の実施と結果を受け入れる覚悟が求められる。

「出生前診断」は胎生期に児の異常を発見し、胎児治療や出生直後からの医療介入を可能にした。しかし、その一方で、何らかの胎児異常の可能性が示されることはカップルには大きな打撃であり、確定診断ではないにもかかわらず、前述の通り、かなりの頻度で人工妊娠中絶が選択されている事実がある。

出生前診断を受けるか否かはカップルのプライバシーにかかわる問題であり、自己決定権が尊重される問題である。中・高校生に対し、出生前診断を教材として扱うことについて、次のことに配慮するように心がけた。

- ①生命の選択につながる可能性を内包する検査を、自分ならどうするか、出生前診断を自分事として考えさせるように配慮した。
- ②出生前診断のメリットとデメリットについては、研究対象者の意見を尊重し、教師の考えを押し付けないようにした。
- ③出生前診断の教材を多面的・多角的に考えるように配慮した。そのために、グループ・ディスカッションを取り入れ、多様な意見に触れさせるようにした。
- ④障がいを持って生まれてきた子どもに偏見を持たせない

いように配慮した。

⑤出生前診断の教材は中・高校生向けであるけれども、若年の妊娠や出産を奨励しているのではないことを理解させるように配慮した。

3 中学校学習指導要領の内容項目と「出生前診断」

小・中学校や高校で新たな課題を教材として取り上げる時には、学習指導要領に準拠しなければならない。小・中学校では、特別の教科 道徳（道徳科）が創設されたので、その内容項目と関連付ける必要がある。高校では、「学校の教育活動全体を通じて行うこと」（第1章 総則 第1款 高等学校教育の基本と教育課程の役割 2(2)）とされている。「出生前診断」を学校の道徳教育の一部として取り上げる時には、学習指導要領との関連を考慮しなければならない。

中学校学習指導要領における道徳科の内容項目に、「生命の尊さ」が取り入れられている。「出生前診断」はこの「生命の尊さ」と関連している。指導計画の作成についての説明では「生命の尊さ」が「生命の尊厳」と言い換えられている。第3章 特別の教科 道徳 第3 指導計画の作成と内容の取扱い 3(1) では、教材についての留意事項として「生命の尊厳、社会参画、自然、伝統と文化、先人の伝記、スポーツ、情報化への対応等の現代的な課題などを題材」とすることが述べられ、生命の尊厳が最初に位置付けられている。これは、「社会参画」などの教材よりも、学習させる優先順位が高いことを意味している。ここでは、中学生に対して、生命を大切にすることが求められている。この場合の「生命」は人間だけではなく、動植物を含んだ広い範囲を指していると理解できる。

「生命の尊さ」は、2017（平成29）年の改訂学習指導要領から新たに設置されたのではなく、その前から内容項目のひとつであった。「出生前診断」を学校で取り上げる時、中学校では、道徳科で集中的に教えることができる。

中学校学習指導要領の道徳科の内容項目から「出生前診断」に関連する学習課題を広く取り上げると、①自主、自律、自由と責任、②家族愛、家庭生活の充実、③生命の尊さ、④よりよく生きる喜びが挙げられる。これらの学習課題は、「このとりのゆりかご」のものと同じである。

高校では道徳科が設置されていないので、学校の教育活動全体で教えることになる。特に、「保健体育」「倫理」などの教科、総合的な学習の時間、特別活動の中のホームルーム活動で教えることができる。

4 教科などにおける「出生前診断」

「出生前診断」に含まれる内容は、小・中学校や高校でどのように取り扱われているのだろうか。小学校では、「出生前診断」という言葉が使用されていない。中学校では、道徳が教科化される以前に、文部科学省が作成した『私たちの道徳 中学校』の中で「出生前診断」という言葉を使用していた。その中の「3 生命を輝(かがや)かせて」の「生命(いのち)を考える (1) かけがえのない自他の生命を尊重して」において、「科学技術の発達と生命倫理」を取り扱っている。生命倫理の問題のひとつとして、「出生前診断」が取り上げられている。他にも、「脳死と臓器提供」「クローン技術」「遺伝子検査」「代理母」が取り上げられている。生徒への課題は、「生命倫理に関する問題について、調べたり、話し合ったりしたことを書いてみよう。」となっている³⁾。しかし、中学校学習指導要領には、「出生前診断」という言葉は見当たらない。

次に、中・高校の保健体育では、「出生前診断」そのものを学習すべき内容として取り扱っていない。中学校の保健では、性情報にどのように対処するのかを考えさせているが、「出生前診断」という言葉は使用されていない。たとえば、保健体育の教科書では、「生殖機能の成熟」や「性とどう向き合うか」を学習する。中学生は、女子の排卵と月経や男子の射精の仕組み、受精と妊娠を学習した後、性意識の変化や性情報への対処と行動を学習する⁴⁾。

高校では、保健体育で妊娠や出産とともに、避妊法や人工妊娠中絶を取り扱っている。高校の保健体育でも、「出生前診断」という言葉は使用されていない⁵⁾。

中・高校の保健体育では、性情報を提供することに力点が置かれており、「出生前診断」のような先進的な技術については取り上げていない。保健体育では、性意識や家族計画の知識を学習する半面、将来経験する可能性のある「出生前診断」は学習していない。保健体育では、セクシュアリティの概念から人の健康を考える教育ではなく、妊娠・出産の過程、性行動の基礎的理解、避妊、性感染症の予防などを中心とした従来の性教育と呼ぶのが適切な内容を学習していると言える。

一方、高校の「倫理」においては、現代的な課題のひとつとして、「出生前診断」を生殖技術との関連で取り上げている。「出生前診断」を「倫理」で取り上げる理由として、第 1 に、科学技術の進歩によって、胎児の診断が可能になったこと、第 2 に、高校生は性機能が発達しているので、妊娠の可能性があること、第 3 に、晩婚化によって高齢出産が多くなっているため、出生前診断を受けるかを考えるようになったことを指摘できる。

「倫理」の教科書では、次のように説明されている。

「生殖技術の発達は、『子どもが欲しい』という不妊(ふにん)の人の素朴な願いにこたえる形で発達している一方、出生前(しゅっしょうぜん)診断の進歩とあいまって、『健やかな子どもの誕生』への願いが『デザインされた子ども』『完璧(かんぺき)な子ども』への限度の無い欲望へと変化しようとしている。」⁶⁾

この説明では、「出生前診断」が生殖技術のひとつとして捉えられているけれども、その中身については説明されていない。さらに、「出生前診断」がもたらすメリットやデメリットも指摘されていない。「出生前診断」は比較的新しい技術であり、その適切性については議論があるので、教科書では取り扱いにくいことも考えられる。現在、「出生前診断」の具体的な中身をどこまで学習するかは、担当教師の裁量に任されている。

Ⅲ 研究方法

1 研究対象者と手続き

研究対象者は、A 大学の健康福祉学部健康科学科・福祉栄養学科、社会福祉学部社会福祉学科等に所属する在学生 75 名である。教職科目「道徳教育論」「公民科指導法」で模擬授業を実施し、終了時に自記式質問紙調査を実施した。実施時期は、2017 (平成 29) 年 12 月 12 日(火)と 13 日(水)である。

2 倫理的配慮

事前に本学の研究倫理委員会による承認を得た(承認番号 17-44)。模擬授業の開始前に、研究の目的・意義、方法、倫理的配慮について口頭および研究説明書、調査用紙を用いて説明し、同意書を配布した。研究への参加は本人の自由意思によるものであること、参加しない場合でも学業成績などに不利益を被ることはないことを確認した。同意書はその場で署名してもらい、回収した。同意しない学生については、他の学生に特定されないように、同意書およびアンケート用紙を白紙のまま提出するように説明した。

3 読み物資料および学習指導案の作成

「出生前診断」を題材にした読み物資料を作成した。この資料は、教育学、看護学の知見を活用して創作した。学習指導案では「出生前診断」の意義と目的の理解を促し、妊婦とそのパートナーの選択を多面的・多角的に考え、さらに当事者の思いや葛藤を推測することを通して、「生命の尊さ」を理解することを目指した。

1) 読み物資料の作成

(1) 読み物資料の問題設定の意図

妊婦とそのパートナーは、妊娠の結果として健康な児を得ることを期待しているが、出生前診断は、誰にでも障害を持つ児が生まれる可能性があることに気づかせる機会である。出生前診断は、希望者に対して母体血を用いたスクリーニング目的の検査を行い、陽性反応が認められるとさらに詳しい検査（羊水検査など）に進む。図1に示すように、出生前診断を受けるか受けないかの判断、受けた場合、陽性・偽陽性の時に確定診断に進むかどうかの判断、さらに、確定診断が陽性のときに産むか産まないかの判断を求められる。

読み物資料では、妊婦が産婦人科医の説明を聞いたのちに、パートナーである夫と相談し、せっかく授かった赤ちゃんだから産むことを選択し、出生前診断を受けないことを決めた。出生前診断のプロセスが進むことは、胎児異常の可能性が高くなることである。カップルは胎児に異常が疑われるときは産まない選択をする傾向にあり、親が胎児の生命の質を評価しているといえる。このことは中・高校生には重い課題であると判断したため、胎児異常の有無には踏み込まない読み物とした。

(2) 配当学年

シーケンス（順序：教材をどの学年で教えるか）は教育課程の枠組みのひとつである。教える学年が適切でないと、教材が簡単すぎたり、難しすぎたりする。その学年の生徒の発達段階を考慮して、教材の難易度を工夫することが大切である。

「出生前診断」に関連する科目は、前述の通り、高校の「保健体育」で妊娠や出産、避妊法、人工妊娠中絶を取り扱っている。「倫理」では、「出生前診断」を生殖技術との関連で取り上げているが、その詳細については学習していない。このため、本研究では生徒の履修状況より発達段階をもとに検討し、対象を高校3年生とした。

2) 読み物資料の概要

「私は、現在37歳の会社員である。妊娠し、予定日は来年の10月である。妊婦健診に行ったとき、担当の産婦人科医から、出生前診断の説明を受けた。そのやり取りは、次のようなものであった。

産婦人科医によれば、妊婦健診の超音波検査をしているが、この検査も出生前診断のひとつで、胎児の発育の程度をみている。このほかに、胎児が何か先天的な病気を持っていないかどうか調べる検査があり、妊婦の血液を採って調べる。この出生前診断を受けるかどうかを尋ねられた。

出生前診断には、妊婦の血液を採取して調べる母体血清マーカー検査や新型出生前診断があるが、確定的な検査ではない。羊水検査や絨毛（じゅうもう）検査を実施することで胎児の異常の有無が確定するが、この検査は流産の危険を伴う。羊水検査の流産の確率は、0.5%未満である。母体血清マーカー検査に比べ、新型出生前診断の方が精度は比較的高いが、費用がかかる。新型出生前診断を受けて陽性になった場合、人工妊娠中絶を選択することが多い。出生前診断を受けるのなら、遺伝カウンセリングを受けることを勧められた。

このような説明を受けた後に、夫と相談した。せっかく授かった赤ちゃんだから産むことを選択し、出生前診断を受けないことを決めた。」

3) 学習指導案の作成

学習指導案では、資料1に示す4つの目標を設定した。これらの目標が学習課題となる。学習課題は、次の通りである。

学習課題1：「出生前診断」の種類と方法及びメリットとデメリットを理解できる。

学習課題2：「出生前診断」を学習することにより、「生命の尊さ」を理解する。

学習課題3：「出生前診断」に関する母親とそのパートナーの選択を多面的・多角的に考える。

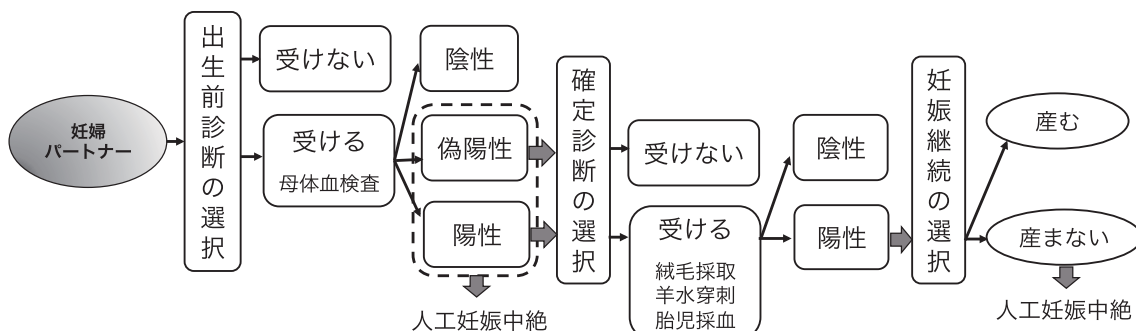


図1 出生前診断のプロセス（著者ら）

学習課題4：「出生前診断」を通して生命の尊さに関心を持ち、将来の自分の問題として考える態度を持つことができる。

主な学習活動として、以下のことを取り上げた。

- ①学習の目当てを確認する。将来子どもが何人欲しいか、生命の始まりはいつかを考える。
 - ②「出生前診断」の目的、種類と方法⁷⁾を理解する。
 - ③配布された読み物資料を読み、内容を理解し、ノートにまとめる。
 - ④母親の立場になり、産婦人科医から出生前診断の説明を聞いた時の気持ちを考える。
 - ⑤グループになり、「新型出生前診断」のメリットとデメリットを考える。
- A「新型出生前診断」のメリット。
B「新型出生前診断」のデメリット。
C胎児の立場になり、母親とそのパートナーの選択を胎児がどう思うかを推測する。
- ⑥学習のまとめをする。
 - ⑦グループで話し合ったことをクラスで発表する。

Ⅳ 結 果

1 研究対象者の概要

模擬授業の対象者75名に対して無記名自記式質問紙を配布し、全員から回答を得、研究対象者とした。所属学科、学年は、健康科学科2年次生60人、3年次生1人、福祉栄養学科2年次生1人、社会福祉学科2年次生7人、3年次生6人で、2年次生68人、3年次生7人だった。性別は女子が49人、男子が12人、無答14人であった。

2 学習課題達成の認識

「出生前診断」を題材とした授業の学習課題4項目について、それぞれ達成できたか否かを尋ねた。「いいえ」「どちらでもない」と回答した場合はその理由を記述してもらった。

- 1) 学習課題1：「出生前診断」の種類と方法及びメリットとデメリットを理解する。

「出生前診断」の種類と方法については、読み物資料の中で超音波検査、母体血清マーカーテスト、新型出生前診断、羊水検査について、説明を加えた。研究対象者からは、「このようなものがあるんだと知ることができてよかったと思います。」などの意見があった。

研究対象者を4～5人のグループに分け、「出生前診断」のメリットとデメリットについてグループで話し合うように指導した。表1に意見を示す。各グループと

も、知識の整理と共有ができたと判断できた。

表1 「出生前診断」の理解

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none"> ・健康状態を知ることができる ・生活の準備ができる ・子どもの将来を考えることができる ・出生前診断を行うことによって、病気が分かる ・出産する時に、前もって心構えを準備することができる ・胎児が病気だと分かったら、最善の治療を行うことができる ・母親の出産に対する不安が減る ・病気を早期に発見できれば、治療もできる 	<ul style="list-style-type: none"> ・羊水検査をするときに、流産する可能性がある ・母体に危険がある ・胎児に異常があると、妊婦は中絶を選んでしまう ・超音波検査、母体血清マーカーテスト、新型出生前診断の的中率が低い ・健康保険が適用されない ・病気を持った子どもを育てるためにはお金がかかるので、人工妊娠中絶の動機となる

- 2) 学習課題2：「出生前診断」を学習することにより、「生命の尊さ」を理解する。

「「生命の尊さ」を学ぶというねらいを達成できる教材でしたか」という質問に対して、表2に示す通り、71人（94.7%）が「はい」と答えた。「どちらでもない」は、自由記述に「少し難しいのではないかなと思う」「自分が産むか中絶するかどちらを選ぶかわかると思うから」「尊さを察することはできたが、学べたかと言われると微妙なところ」、と回答していた。

他方、「この教材は、「生命の尊さ」について深く考えることのできるものでしたか」という質問に対して、70人（93.4%）が「はい」と答えた。「どちらでもない」は、自由記述に「医者・妻・夫の主張が重視されていて、少し薄れていたと思うから」「生命に関する選択の重要性に重点がいている気がする」と回答していた。

表2 学習課題の達成に関する認識について

人（%）

質問項目	はい	いいえ	どちらでもない	無答
「生命の尊さを学ぶ」というねらいを達成できる教材でしたか	71(94.7)	1(1.3)	3(4.0)	0(0.0)
「生命の尊さ」について深く考えることのできるものでしたか	70(93.4)	1(1.3)	3(4.0)	1(1.3)

- 3) 学習課題3：「出生前診断」に関する母親とそのパートナーの選択を多面的・多角的に考える。

「出生前診断」の読み物資料について、研究対象者に多面的・多角的思考を促すために登場人物の立場にたって考えるように指導した。ひとつは、産婦人科医から出生前診断の説明を聞いた時の母親の立場になり、母親の

気持ちを推測させた。もうひとつは、胎児の立場になり、母親とそのパートナーの選択をどう思うかを推測させた。

母親の立場になった研究対象者は、「こんな診断があるんだ」「赤ちゃんに影響があるかもしれない」などと回答した。

胎児の立場になると、「どのような状態でも、生まれる」「育ててほしい」「産んだ限りは育ててほしい」「死ぬから嫌や」「産んでほしい、受け入れてほしいという気持ちと、もし生（産）まれたことによって負担になるぐらいなら、産んでほしくない」（括弧内は、研究代表者が記載した。以下同様）、「病気を持っている」と仮定した場合は、治療してほしかった。先に知ることによって治療できるから、先に治療してほしかった」などと回答した。このような回答は、傍観者的な立場から母親と胎児の立場になることによって表されるものである。また、グループワークによって、ひとつの視点からだけでなく、複数の視点から登場人物の考えを類推することができた。

4) 学習課題4：「出生前診断」を通して生命の尊さに関心を持ち、将来の自分の問題として考える態度を持つことができる。

出生前診断の教材に関する意見、感想の自由記述では、読み物資料は「生命について考えさせられる教材だった」「すごく良い物語だった」と評価しており、「産まれる前の赤ちゃんについて考えることは少し難しかった。自分も将来産むと思うので、出生前診断を知れてよかった」と述べていた。模擬授業は「生命について考えるキッカケになると思った」「自分が将来、経験するかもしれないことだったので、すごく興味のあるテーマでよかったです。改めて命の大切さを感じ（ら）れた」という回答があった。

「出生前診断」を自分の問題として考える態度について、「やっぱり自分の立場で考えるとしんどい所もある。出生前に病気の有無を知ってしまったら、準備はできるが、気持ちもたないかもしれない。夫婦だけではなく自分たちの父母が反対する場合もある。たとえ障がいがあっても、生きていけるのなら生きてほしい。今の社会福祉の現状も考え、子どもを生むか考えたい。また、そういう子をもつ親の話をきける機会があれば、生むという選択になるかもしれない。」という回答があった。複数の研究対象者から「自分ならどうするか・・・決められない」「機会があれば、生むという選択になるかもしれない」と、判断に迷う気持ちが表現された。「決められない」「しんどい」と回答した研究対象者は、今は結

論に至っていないとしても、「出生前診断」を自分事として考えているといえる。

3 道徳教材としての適切性

1) 道徳教材としての中立性

「この教材は、特定の見方や考え方に偏った取り扱いはなされていないものでしたか」の質問については、表3に示す通り、「はい」が67人（88.3%）であった。「どちらでもない」と回答した研究対象者の自由記述欄には、「産む選択の回答しか用意されていなかったため」「出生前診断に反対のような感じがしたから」という回答があった。

表3 道徳教材としての適切性について

人（%）

質問項目	はい	いいえ	どちらでもない
特定の見方や考え方に偏った取り扱いはなされていないものでしたか	67(88.3)	2(2.7)	6(8.0)
この教材は高校3年生を対象に授業をするとしたら、発達段階から見て適切な学年だと思いますか	73(97.3)	2(2.7)	0(0.0)

2) 学習者の発達段階をふまえた配当学年の判断について

「この教材は高校3年生を対象に授業をするとしたら、発達段階から見て適切な学年だと思いますか。」の質問に対しては、表3に示す通り、「はい」が73人（97.3%）、「いいえ」が2人（2.7%）であった。「いいえ」と回答した研究対象者の記述欄には、「なんとなく」「遅すぎると思う。」という回答があった。

次に、「この教材は発達段階から見てどの学年が適切だと思いますか。」という質問に対しては、回答が分かれた。複数学年を選択した回答が9人（12.0%）いたが、これらを含めた延べ人数を集計すると、中学1年生が5人（6.7%）、中学2年生が6人（8.0%）、中学3年生が11人（14.7%）、高校1年生が25人（33.3%）、高校2年生が24人（32.0%）、高校3年生が23人（30.7%）、「中学校及び高校では教えるべきではない」が1人（1.3%）であった。中学生で学習させて良いと考えるものが21人（28.0%）、高校生が適切であるとするものが59人（78.7%）であった。

この結果から、大学生たちは、高校生になれば十分にこの問題を考えられると判断していることが示された。

それぞれの学年を選んだ理由を尋ね、回答を抜粋して表5に示した。中学生を選んだものには「出生前診断」を考える教材としてより、性教育としての期待がうかが

われ、本来の目的から逸脱していると判断した。高校生は妊娠・出産について関心が高くなる時期であると同時に、遺伝の知識など、他の科目での学びが進んでいることが判断の根拠になっていることが示された。

4 道徳の授業に対する提言と意見

1) 道徳の授業における配慮事項

この教材を用いて「授業をするとき、教師はどのような配慮をすべきだと思いますか。」という質問に対する研究対象者の意見を整理し、次の 7 つに要約した。

① 肯定や否定するのではなく、中立性を保つ。

教師が生徒の考えを誘導することなく、「出生前診断を肯定も否定もしない言い方」を心掛け、「出生前診断について可もなく不可もなく中立的立場で授業を行うべきだと思う」と述べていた。

② 生徒の発言を受容する。

生徒の意見を否定することなく、まず受け止めて、「意見をまとめ、伝えるべきことを伝える」のが教師の役割であり、「どんな意見も否定しない」ことや、「偏った考えを押しつけないようにする」ことが大切だと述べていた。

③ 生徒に考えさせる。

生徒が、将来の自分の問題として考える態度を持つことができることが学習課題の 1 つである。「考える時間を確保」し、「みんなが考えを深められるような導入をする」ことが必要と述べていた。

また、出生前診断は答えが定まらない論争的な問題を含んでいるため、「全員が考えるように配慮すべき」として、「自分の意見を考えさせる」ようにすると述べていた。

④ 分かりやすい説明をする。

「出生前診断」について、事前に十分な知識を持って授業に参加しているのではないので、基本的な知識の提供は必須である。「わかりやすい解説」が必要であり、「難しい言葉や、もしかしたら意味がわからないことがあるかもしれないから、わかりやすい言葉におきかえるなどすると良い」と述べていた。

⑤ 男女の意見の差異を尊重する。

「出生前診断」は「性別を問わず男性女性どちらにも関係する事を伝え」た上で、「女性や男性の意見が違おうと思うので、両方の意見を聞いてみる」ことや「男子・

表 4 適切と思う学年
複数回答 人 (%)

質問項目： この教材は発達段階から見てどの学年が適切だと思いますか	中学 1 年	5 (6.7)	21 (28.0)
	中学 2 年	6 (8.0)	
	中学 3 年	11 (14.7)	
	高校 1 年	25 (33.3)	59 (78.7)
	高校 2 年	24 (32.0)	
	高校 3 年	23 (30.7)	
	教えるべきではない	1 (1.3)	1 (1.3)

表 5 「出生前診断」を取り上げるのに適切な学年とその理由

適切な学年	適切であると思った理由
中学 1 年生	・大切なことだから、早く教えたほうが良い
中学 2 年生	・思春期を迎え、心身ともに発達すること、保健体育で性教育が始まることを踏まえて判断しました ・子どもを生む可能性は、中学生からあるが、中 1 には早い気がしたため、中 2 にした。子どもを生む前に受けてほしいと思った。 ・ある程度早い段階で生命の尊さを学べば、若いころの望まない妊娠などを防ぐことができるから
中学 3 年生	・妊娠する可能性が出てくる学年だから。 ・結婚や恋愛に興味のわく年代だと思うから ・中学生でも妊娠したりする時代でもあるので、その年代からしっかりと教えていくべきだと思う。
高校 1 年生	・妊娠や中絶について理解が必要になり始める時期であるから。 ・中学生ではちょっと難しい話だったから。 ・染色体や遺伝を学んだのがそれくらいだったから。 ・着床などの言葉を分かってくる時期だと思ったから。 ・女子生徒は、結婚ができる歳だから、出産についても考えていたほうが良い
高校 2 年生	・保健の時間である程度は勉強し理解しているから。 ・進路や結婚について年齢が近いと思ったから ・高校になれてきて、出産や妊娠について考えられる年だから。 ・高校での学びもある程度進んだ学年ではないかと思うから。 ・将来的にも考えることができるし、妊娠の可能性もあるから
高校 3 年生	・女性は 16 歳、男性は 18 歳から結婚できるということを考えると、家族（家庭）を持ち、子ども育てることについて考えるきっかけになると考える ・妊娠について考える時期だと思うから ・子供を作ることが可能になる年代だと思う ・発達段階からみて適切だと感じたから。
中学校及び高校では教えるべきではない	・高校生は妊娠する子が多くなるから。

女子両方の意見を均等に聞く」こと、男女の意見の差異を尊重する態度を持つことが述べられている。「女性だけの問題にしてしまいそう」との危惧を持つものもあり、「空気を軽くしないようにする。男子でも考える内容がほしい」「グループワークに参加していない人がないように配慮する」との対策もあげられた。

⑥ 妊娠や中絶をしている生徒に配慮する。

高校生になると、「妊娠していたり」「中絶したことがあったりする生徒がいてもおかしくない」と述べ、「心のケアについて配慮する」ことや「言い方に注意する」ことをあげていた。

⑦ 障害を持つ生徒に配慮する。

障害のある生徒がいる可能性、あるいは「障害を持っている家族を持つ生徒がいないか、流産してしまった家族を持つ生徒がいないか」「実際に障害をもっている兄弟がいる人への配慮」など、障害のある人があることに配慮することをあげていた。

2) 事例の転帰について

研究対象者のひとは、「最終的な結論をどこにもっていくかが重要になってくると考える。」という意見を記述していた。また、読み物資料の終わりの部分が物足りないという意見もあった。「終りがよく分からなかったです。検査を「する」「しない」どちらを良い悪いとするかは、結論として出せない教材である。でも、「する」「しない」両方の選択のうらに「子どもが大事」という思いがある。自分でも思いつかないけど、何か良いまとめがあれば良いなと思いました。」これらの意見は、ひとつの正解が提示されることに研究対象者が慣れていることを表している。

V 考 察

1 問題解決学習の達成状況

「出生前診断」の道徳教材により、問題解決学習を実践する道徳教材として役立つのかを考えてみる。問題解決学習は、「考え、議論する道徳」を実施できる指導方法である。問題解決的な学習は、中学校学習指導要領 第3章特別の教科 道徳 第3 指導計画の作成と内容の取扱い 2(5)において、指導方法のひとつとして位置付けられている。問題解決的な学習とは何かをもう少し詳しく見てみよう。中学校学習指導要領解説 第4章 指導計画の作成と内容の取扱い 第3節指導の配慮事項 5問題解決的な学習など多様な方法を取り入れた指導

(1) 道徳科における問題解決的な学習の工夫 によれば、「生徒が学習主題として何らかの問題を自覚し、その解決法についても主体的・能動的に取り組み、考えて

いくことにより学んでいく学習方法である。」とされている。

問題解決的な学習は、もともと J. デューイ (J. Dewey) が定式化した問題解決学習を源泉としている。デューイの問題解決学習は、知識を獲得する時の探究の過程であり、反省的思考の5段階から導き出されている。問題解決学習は、①経験的事態からの出発、②問題の感得、③資料の蒐集、④仮説の構成、⑤仮説の吟味から構成される⁸⁾。この問題解決学習を単純化すると、問題解決学習は、問題の設定、資料の収集、解決策（仮説）の創出と検証、になる。

では、「出生前診断」の模擬授業を通して問題解決学習が実践されたのか。まず、「問題の感得」については、本来であれば、生徒自身が問題を発見することが望ましいが、教師が問題を設定することが多い。生徒が発見する場合、時間がかかりすぎること、教師が期待した問題を選択しないことが挙げられる。模擬授業では、教師が選択した問題を研究対象者に提示した。

次に、「資料の蒐集」については、1単位時間の授業では、生徒が時間をかけて資料を収集することが難しい。そこで、読み物資料の中に、「出生前診断」の目的、種類や方法の手掛かりを示しておいた。

さらに、解決策としては、「出生前診断」を受けるか受けないかのどちらかを選択することになる。これを選択する時、「出生前診断」のメリットとデメリットを比較することが必要になる。研究対象者は、解決策を導き出すために反省的思考を行っていると言える。最終的に、受けるか受けないかを決められない場合でも、「主体的・能動的に」どちらが良いかを考えていると思われる。受けるか受けないかの答えが最初から決まっていないうちに、研究対象者は答えを得るために考えなければならない。グループ・ディスカッションを通して自分の意見を発表したり、他のメンバーの意見を聞いたりすることにより、研究対象者は深い思考が実現できると考えられる。研究対象者は、「グループワークを行なったり皆が参加できるようにする。」ことを教師の配慮事項として書いている。この意見は、グループで意見を出し合う方が生産的であることを示している。しかし、今回のアンケート調査では、研究対象者の考えの変容を十分確認することができなかったことが今後の課題として残る。

以上のことから、「出生前診断」の模擬授業を通して、受けるか受けないかを研究対象者が深く考えたという点で、問題解決学習が実践されたと言える。

2 資質・能力の3つの柱を育成する視点からの評価

2018（平成30）年3月に公示された高等学校学習指

導要領では、「学校教育全体及び各教科・科目等の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのか」に対して、① 知識及び技能の習得、② 思考力、判断力、表現力等の育成、③ 学びに向かう力、人間性等の涵養を 3 つの柱としている。

1) 知識及び技能について

研究対象者としての大学生は、模擬授業の前には「出生前診断」の目的や種類などをほとんど知らなかった。ニュースでは、時々取り上げられているが、見ていない。中・高校生は、さらに「出生前診断」を知らないと思える。新しい知識であるため、研究対象者の大半は出生前診断に関心をもったように思われる。

「出生前診断」の技術は、既に関係され、運用されている。妊娠すると、産科医が「出生前診断」を説明してくれる。「出生前診断」は将来、現実のこととして直面することである。このような「出生前診断」を知ること、妊娠する可能性がある生徒にとって、大切なことである。

2) 思考力などを育成することについて

出生前診断を道徳教材のひとつとして取り上げた理由は、「生命の尊さ」を理解してほしかったためである。模擬授業の目標の中心は、生命を尊ぶことであった。簡単に答えが得られる道徳教材では、思考力などを育成することができない。むしろ、答えが簡単に見つからない道徳教材が望ましいのである。最終的に答えに至らなくても、思考する過程が大切である。研究対象者からは、「命について考えられるいい機会だと思う。」などの意見があった。

答えが決まっていなかったり、複数あったりする問題については、答えを得るためにそれぞれが自分で考えなければならない。生徒も、答えが決まっていない問題を解決しようとすれば、自分で考えなければならない。「出生前診断」は答えが決まっていないので、道徳教材として活用できる。

3) 人間性などの涵養について

「出生前診断」は、研究対象者としての大学生が将来直面する問題である。問題を自分事として考えることが必要である。従来の道徳教材は、他人事が多く取り上げられていた。先人の伝記で登場した人物の多くは、並外れた能力の持ち主であったり、強い意思と行動力を発揮したりしている。先人の伝記に関する読み物資料からは、自分には何ができるか、将来どのように行動していくかを問うことが要請されている。

人間性などの涵養を言い換えると、道徳的实践意欲と態度を育成することである。道徳的实践意欲と態度は道徳の諸様相の一部であり、中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 第 2 章 道徳教育の目標 第 2 節 道徳科の目標 4 道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる (平成 29 年 7 月 文部科学省) に、次のように説明されている。

「道徳的实践意欲と態度は、道徳的判断力や道徳的心情によって価値があるとされた行動をとろうとする傾向性を意味する。道徳的实践意欲は、道徳的判断力や道徳的心情を基盤とし道徳的価値を実現しようとする意志の働きであり、道徳的態度は、それらに裏付けられた具体的な道徳的行為への身構えとすることができる。」

「出生前診断」に即していえば、将来自分が妊娠した時、受けるか受けないかを選択する行動をとることになる。この選択は、道徳的判断力や道徳的心情に基づいて行動することを意味している。「出生前診断」の模擬授業は、知識を学び、深く考え、将来自分はどのような行動をとるかを決めるのに役立つと思われる。

3 道徳教材としての中立性

読み物資料の中立性について約 9 割が偏りはないと回答した。残る 1 割弱は、カップルが出生前診断を受けないと判断した結末は、すでに出生前診断に反対の意思を示しているのではないかと疑問を投げかけた。生命倫理に関わる問題を直視するものにしようがよかったか、あるいは出生前診断を受けるかどうか迷う段階で止めるほうがよかったか、別の選択肢もあったと考える。さらに検討を重ねたい。

4 学習者の発達段階をふまえた配当学年

「出生前診断」は生徒の発達段階から高校 3 年生向けの教材として作成した。アンケート調査で高校 3 年生が適切かと尋ねると、研究対象者の 97.3% が賛成していた。高校生を対象とすることに研究対象者の 78.7% が賛成し、むしろ中学生を含む低い学年でも理解できる難易度の教材であると判断していた。この時期は妊娠する可能性の出てくる年ごろなので、適切な知識を早く提供することが望ましいと考えていることが示された。

「出生前診断」は妊娠継続を希望するカップルが、胎児異常の可能性によって我が子の生命の選択を迫られる問題である。当事者への遺伝カウンセリングの重要性が指摘されているが、出生前診断の賛否は、親の自己決定権、胎児の生存権、社会の意識、宗教の関与等々を交えて議論は尽きない。高校生には重い課題と考えたが、研

究対象者はそれぞれの経験に基づく道徳観、倫理観で、自分なりの考えをまとめていた。結論は出せないとする記述もあったが、正解に至るより考えることの重要性、他者との議論を通して自分なりの道徳観・倫理観を醸成する過程の大切さを考えると、約8割が高校1年生以上に適した教材であると判断していることの意味は大きい。

5 研究の限界と今後の課題

本研究の研究対象者は、人が健康に生きることを追求する学問領域を専攻した大学生75名であり、一般化するには限界がある。さらに調査を継続してデータの集積を図るとともに、研究対象者を他分野の学生や高校生に広げて検討することも必要と考える。

今後の課題として、次のことを指摘できる。

- ① 「出生前診断」について知らない学生が多かった。知識として身に付けておくことが望ましいが、いつの時期に取り上げるのが適切であるか検討が必要である。
- ② 「出生前診断」はプロセスの中で、判断を求められる時が複数回ある。教材として何を問うかを吟味し、読み物資料を精練する必要がある。
- ③ 「出生前診断」を学校教育で取り上げるとき、どの科目で取り上げるのが適切なかを検討する。道徳科で取り上げる場合には、学習指導要領との関連を考慮し、答えが定まらない論争的な問題であることを踏まえ、教育方法を吟味する必要がある。道徳科の他には、保健体育、倫理、総合的な学習の時間などがある。特に、高校では道徳科を設置していないので、学校全体の教育課程のどこに位置付けるかを検討する必要がある。

VI 結 論

以上のことから、次の4点が確認された。

- ① 「出生前診断」を題材にした道徳教材は、中学校学習指導要領の内容項目のうち、「生命の尊さ」を学ぶというねらいを達成できたと結論付けられる。
- ② 「出生前診断」を題材にした道徳教材を多面的・多角的に考えることについては、母親と胎児の立場になることで思考が広がると思われる。
- ③ 「出生前診断」を題材にした道徳教材を学習することにより、将来の自分の問題として考えられることが確認された。
- ④ 配当学年については、生徒の発達段階から高校3年生を対象に考えていたが、約8割が高校1年生以上に適した教材であると判断したことが確認された。

本論文は、2017～2019年度 JSPS 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）の助成による基盤研究（C）、課題番号 17K04895「アクティブ・ラーニングを用いた道徳教材の開発と評価方法に関する研究」の研究成果の一部である。

注

- 1) 伊藤利明、石村由利子、「『こうのとりのゆりかご』を題材にした道徳教材の開発と検討」、『人文科学論集』第98号、2019年、21-37頁。
- 2) NIPT コンソーシアム、「NIPT コンソーシアムの実績と報告 日本国内での母体血胎児染色体検査の実績」http://nipt.jp/nipt_04.html NIPT コンソーシアム（参照2019-4-25）
- 3) 文部科学省、『わたしたちの道徳 中学校』、廣済堂あかつき、2014年、104頁。
- 4) 森昭三、佐伯年詩雄他30名、「保健編 1章心身の発達と心の健康 3生殖機能の成熟 性とう向き合うか」、『新・中学保健体育』、学研、2016年、14-19頁。
- 5) 和倉正勝、高橋健夫他31名、2単元 生涯を通じる健康 4妊娠・出産と健康 5家族計画と人工妊娠中絶、『現代高等保健体育改訂版』、大修館書店、2017年、70-73頁
- 6) 竹内整一他7名、「第5章現代の課題を考える 1生命生殖技術と家族」、『倫理』、東京書籍、2016年、175頁。
- 7) 模擬授業では、教師が「出生前診断」の目的と種類・方法を説明した。

1 「出生前診断」の目的

出生前診断の目的は、広義には胎児の成長の様子を出産前に調べることである。狭義には、胎児の染色体異常などがあるかどうかを診断することである。

2 出生前診断の種類や方法

読み物資料に関連して、出生前診断の種類や方法を簡単に説明した。

①超音波検査

超音波検査は、妊婦の腹壁から腹腔内の胎児に超音波をあて、その反射エコーを検出して胎児の様子を画像に映し出す検査である。胎児の形態異常の観察に利用する。

②母体血清マーカーテスト

母体血清マーカーテストは、妊婦の血液を採取して、血液の中の3～4種類の物質を測定する検査である。非確定検査であり、確定するためには羊水検査を受ける。

③新型出生前診断

新型出生前診断は、妊婦の血液を採取し、胎児の細胞の染色体を調べる検査である。調べることのできる染色体は、13、18、21番である。精度は高いが、非確定検査である。

④羊水検査

羊水検査は、妊婦の腹部から穿刺針を羊水腔へ穿刺して羊水の一部を吸引し、羊水中の物質や胎児の細胞を調べる確定検査である。

- 8) 田浦武雄、「教育的認識論 五知識の本質と教育」、『デュエイとその時代』、玉川大学出版部、1984年、134-135頁。

資料 1 学習指導案

平成 29 年 12 月〇〇日 (水)
健康福祉学部・社会福祉学部
指導者 伊藤利明

1 主題名 出生前診断と赤ちゃんの生命 (高校 3 年生対象)

2 教材 出生前診断に関する自作資料

3 目標

- ①「出生前診断」の種類と方法及びメリットとデメリットをおおまかに理解できる。
- ②「出生前診断」を学習することにより、「生命の尊さ」を理解する。
- ③「出生前診断」に関する母親とそのパートナーの選択を多面的・多角的に考える。
- ④「出生前診断」を通して生命の尊さに関心を持ち、将来の自分の問題として考える態度を持つことができる。

4 指導過程

過程	時間	主な学習活動	教師の支援
導入	5 分	①学習の目当てを確認する。 将来子どもが何人欲しいか、生命の始まりはいつかを考える。 ②出生前診断の目的、種類と方法を理解する。	子どもは何人欲しいかなど、答えやすい質問をして、積極的に答えさせる。 出生前診断の目的、種類と方法をわかりやすく整理して説明する。 読み物資料を配布する。
展開	40 分	③配布された読み物資料を読み、内容を理解し、ノートにまとめる。 ④母親の立場になり、産婦人科医から出生前診断の説明を聞いた時の気持ちを考える。 ⑤グループになり、新型出生前診断のメリットとデメリットを考える。 A「新型出生前診断」のメリット。 予想されるメリットの例。 ・安全な検査である。 ・病気によっては、赤ちゃんのときに、治療ができる。 ・赤ちゃんに病気が発見されたら、心の準備や今後の生活の準備ができる。 B「新型出生前診断」のデメリット。 予想されるデメリットの例。 ・羊水検査には流産のリスクが伴う。 ・安易に人工妊娠中絶を増やす。 ・中絶は母親の体への負担だけではなく、親の精神的負担も大きい。 C 胎児の立場になり、母親とそのパートナーの選択をどう思うかを推測する。 ⑥グループで話し合ったことをクラスで発表する。	資料に記載されている内容をノートにまとめる時間を与える。 母親の戸惑いや不安が大きいことに気付かせる。 4～5 人のグループを作り、司会、発表者、記録係を決めるように指示する。 読み物資料からメリットとデメリットを考えさせる。 メリットやデメリットを思いつかない場合、教師が追加で説明することも考えておく。 胎児治療の具体例を簡単に説明できるように準備しておく。 0.5% の数字の重みを考えさせる。
終末	5 分	⑦学習のまとめをする。 出生前診断のメリットとデメリットを確認する。 子どもを産むことは母親とそのパートナーで選択することであり、授かった赤ちゃんの命の大切さを考えることを理解する。	中絶する母親の立場になり、気持ちを考えさせる。 新型出生前診断の検査を受けないという母親とそのパートナーの選択に対して、胎児がどう思うかを考えさせる。 発表の時間を調整する。 授業で学んだことをノートにまとめさせる。 胎児の生きたいと思う願いを伝える。 子どもを産むことは、母親とそのパートナーにとっても、赤ちゃんにとっても重大なことであることを理解させる。